GOD EATER ORPHANS

排瀬ルツミ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ゴッドイーター　×　異世界オルガです。やりたかっただけ。

アラガミが蔓延る極東に、オルガ・イツカと三日月・オーガスは舞い降りた。ＭＳが使えず、戦力が皆無な状況を打破するべく、二人は適性試験を受けることになる。

目　次

鉄と血と、神と人と ―― 1
フリージア ―― 6

鉄と血と、神と人と

「今から対アラガミ部隊〝ゴッドイーター〟の適性試験を始める。まずはリラックスしたまえ。その方が良い結果が出やすい」
　高い位置にある窓の向こうから声が掛けられた。あれがこのフェンリル極東支部の局長、ヨハネス・フォン・シックザールだろう。近くには研究員らしき人影も見える。
「その前に一ついいか？」
　その男を睨みつけながら、俺は口を開く。
「……何だね？」
「この手術を受ければ、俺はあのバケモノを倒す力を得られるんだな？」
「その通りだ。神器に認められれば君はめでたく〝ゴッドイーター〟――神器使いとなる。その力で、この極東地域に蔓延するアラガミを駆逐するのだ」
「……」
　この世界ではバルバトスが使えない。獅電も同じく呼び出せない。だからこそ、俺とミカにはＭＳ（モビルスーツ）に頼らない力が要る。
　適性ありと判断されたのは幸運だった。アラガミというバケモノに対抗する同じオラクル細胞を用いた武器――つまり神器を用いるしかない。目の前のでかい機械はそれを使うための手術に使う道具だ。こいつに手を突っ込めば、俺はこの世界で戦える。
「分かった。鉄華団はあんたの側に乗ってやる」
　機械の中にある剣に手を伸ばし、柄を握る。同時にがちゃりと機械音。
「は？」
　部屋の天井を見上げると、手元の機械を上下に反転させたようなものが張り付いていた。――いや、あれはこの機械の上半分だ。
　上部分が一気に降りてきて、下部分の機械と重なり合う。手首の周りの赤い部分がぴたりとくっつき、ぐじゅぐじゅと肉を啜るようなおぞましい音が手首から発せられる。

「うっ！」
　阿頼耶識の手術に匹敵するほどの苦痛が俺を襲った。立っていられず膝をつく。呻きを上げても手術の痛みは止まらない。
　肉と皮を引き剥がされて、無数の針を突き刺されるような苦痛。身体の内側を虫が這いまわるような不快感。永遠のような数秒が過ぎて、機械が再び二つに分かれた。
「大丈夫かね？」
「こんくれぇなんてことはねえ。俺は、鉄華団団長、オルガ・イツカだぞ……！」
「ならば結構。これで君の身体にはアラガミと同じ細胞が組み込まれた。これからの健闘を祈るよ、〝ゴッドイーター〟」
　さきほどの苦痛が嘘のように痛みが引いた手首を見る。そこには血の色の、真っ赤な腕輪が装着されていた。

「ガムいる？」
「いらない」
「あ、そう。お前は？　……あ、ごめん。今のが最後だった」
　メディカルチェックまでは待機と言われたので、座って待つべくロビーのソファーに向かう。そこにはすでに三人が座っていた。ガムを勧める帽子を被った男とフェンリルの制服を着た男、そして俺の相棒だ。
「ミカ。隣いいか？」
「うん。……ははっ、オシャレだね、それ」
「お前もな」
　三人は全員が右手に腕輪をつけていた。帽子の奴が話しかけてくる。
「あんたもゴッドイーターなんだ。俺より年上みたいだけど、先に試験を受けた俺が先輩ってことで。俺、藤木コウタ。よろしくな」
「ああ。俺は、オルガ・イツカだ」
「なんだよ、その辛そうな自己紹介。……そういや名前聞いてなかったな。お前ら、名前なんていうの？」

コウタがミカともう一人の男に聞く。火星ヤシを飲み込んでからミカが答えた。
「三日月・オーガス。……です」
「ふうん。で、おまえは？」
「……神薙ユウ」
「オッケー。ミカヅキにユウ、だな」
全員の名前を聞いたコウタは、一人ずつ指差して確認する。「オルガ、ミカヅキ、それとユウ」最後に自分を親指で示して、
「コウタ。……よし、みんなよろしく！」
名乗ったあと握手を求めてきた。ユウが快く受け、次いでミカの手を握ろうとしたとき、ソファーに足音が近付いてきた。
「立て」
「は？」
「立つんだ」
女の声が俺たちに命令する。最初は誰も従わなかった。二度目の強い口調でコウタとユウがびくりと立ち上がる。
「……」
まだ立ち上がらない俺とミカを、女は冷たい視線で見下ろしてくる。それを俺は睨み返し、ミカは我関せずといった様子で新しい火星ヤシを口に含む。
「なぜ立ち上がらない」
「どうしてあんたの命令を聞かなくちゃなんねえんだ？　筋の通らねえことに命は張れねえよ」
「私はお前たちの上官だ。お前たちは私の命令を聞く義務がある」
「ハイ」
俺はすくりと立ち上がった。続いてミカも立ち上がる。
空気はぴりぴりと張り詰めたままだ。それが落ち着かないといった様子でコウタはそわそわしている。挙動不審なコウタを上官女は一瞥した。
「雨宮ツバキだ。生き延びたければ私の命令には全てイエスで答えろ、いいな？」

「ハイ」
「返事をしろ！」
「はいっ！」
　ツバキの命令にコウタが背筋を伸ばして大きな声で返事をする。ユウとミカは怯えた様子もなく淡々と返答し、俺は二度目の返事をした。
「メディカルチェックの予定が立った。神薙ユウ、三日月・オーガス。お前たちはヒトサンマルマルまでにサカキ博士の研究室に行け。その他の者は医務室に」
「ハイ」
「なんでユウだけ別なの？」
　ミカがツバキに聞いた。ツバキは不機嫌そうにため息をついてその質問に答える。
「神薙は極東支部初の新型だからだ」
「新型？　なにそれ？」
「……サカキ博士に聞くといい」
　再び大きなため息をつき、ツバキは俺たちに背を向けた。
　ツバキがエレベーターで去ったのを見て、コウタは大きく安堵の息を吐いた。
「ああ、緊張した」
「大丈夫か？」
「誰のせいだと思ってんだ。お前が変に反抗しなけりゃここまで悪い空気にならなかっただろ」
「それは……」
　空気を入れすぎて破裂した風船のごとく、コウタは俺に激しい剣幕でまくしたててくる。その肩をユウが叩いた。
「何だよ！」
「時間」
「あ？　……まだ十分以上前じゃねえか！」
「ここの構造がまだよく分かってない。だから早めに動くべきだ」
「……ッ」

鬱憤を晴らし終えていないのだろう、コウタが叱責を続けるか移動するか、その選択に分かりやすく悩んでいる。
うーんうーんとコウタは唸る。選択が長くかかると見て、ユウはミカと俺にも聞いてきた。
「二人はどうする？」
「……どうする？」
投げかけられた質問を、ミカはそのまま俺に渡してきた。
俺は返答に困る。仲間（コウタ）を置いて行っていいのだろうか。いや、置いていくわけにはいかない。――鉄華団は、仲間を見捨てることはない。
「ミカ！」
叫ぶと、ミカは俺の胸倉を掴み上げてきた。それを即座に振り払う。
「ああ分かったよ！　連れてってやるよ！　俺が……お前を、お前らを、そこに連れてってやるよ！」
俺はエレベーターに向かって駆け出した。後をミカとユウ、引っ張られて動くコウタがついてくる。エレベーターが向かう先は、『アナグラ』の名が示す通りの地下だ。博士の研究室、そして医務室に向けて、エレベーターは下っていく。

フリージア

「おらぁ！」
小型アラガミ〝オウガテイル〟に神器を叩きつける。
今日はゴッドイーターとしての初仕事だ。ベテランの指導のもと、俺たち新人ゴッドイーターはアラガミを狩る。
「いいぞオルガ！　君は筋がいい！　華麗に戦えている！」
俺とコウタの初任務に同行したベテランは二人だ。フードを被ったバスター使い『ソーマ・シックザール』と赤いサングラス男『エリック・デア＝フォーゲルファイデ』。
「へっ、当たり前だ。こんなもんじゃねえぞ！」
辺りを見渡すが、立っているオウガテイルは一体もいない。全て倒したのだ。掲げた神器を振り下ろす先が見つけられず、仕方なくその場でそっと下ろす。
「これで終わりだな」
「そうだね、ソーマ。今日も華麗な勝利だ！」
ははは、とエリックは笑う。上から迫る陰に彼は気付かない。
「エリックさんッ！　上！」
コウタが叫ぶ。瓦礫の山をよじ登ってオウガテイルが回り込んできていたのだ。エリックが見上げると同時に、オウガテイルは大口を開けて飛び下りる。
「うわあぁぁッ！」
「何やってんだあぁッ！」
窮地のエリックを救うべく地面を蹴る。ぎりぎり間に合って、オウガテイルの下からエリックを突き飛ばす。
ぐちゃり、と肉が噛み千切られた。俺の上半身が喰われている。
「チッ！」
ソーマが神器を一薙ぎする。俺を喰っていたオウガテイルは吹き飛んで動かなくなる。そして俺も動けない。
「……オルガ？」
「俺の身代わりになって……くそっ、こんなの華麗じゃない！」

コウタが俺の亡骸を揺すった。何の反応もないのを見て拳を固く握る。
「人が……こんな簡単に……」
「この職場じゃ日常茶飯事だ。覚悟がないなら辞めちまえ」
「ソーマ！　友を亡くした新人にかける言葉か、それは！」
「……フン」
ソーマが背を向けて歩きはじめる。エリックもコウタもそれぞれの思いを胸に彼を追った。その背後で俺はゆらりと立ち上がる。
「何だ……!?」
気配を感じ取ったのかソーマが勢いよく振り向いた。確実に死んでいたはずなのに起き上がった俺を見て、表情が驚愕に凍る。
「無事だったのか、オルガ！」
駆け寄ろうとしたコウタを手で制す。神器を俺に向けて、険しい表情で問う。
「お前は一体……？」
「俺は……鉄華団団長……オルガ・イツカだぞ……！」
「は？」
「守んのは俺の仕事だ。こんくれえなんてこたあねえ……！」
血の混じった唾を吐く。俺はオウガテイルに喰い殺されたが、『いつもみたいに』生き返った。俺はこの世界でも止まらない。
まだ少し痛む身体をぽきぽきと鳴らしながら、俺は落とした神器を拾い上げる。
「さあ帰ろうぜ。俺たちの居場所（アナグラ）に」

「命令は三つだ。死ぬな。死にそうになったら逃げろ。そんで隠れろ。運が良ければ不意をついてぶっ殺せ」
リンドウの指示を新人二人は聞いている。どちらも緊張しているようだ。
「おっと、これじゃ四つか」
「了解」
「分かった……です」

「堅苦しいな。力抜いていこうぜルーキー」
二人の肩をリンドウは叩く。きぃいっ、と甲高い叫び声が聞こえて全員がそちらを向いた。
〝ザイゴート〟だ。飛行タイプの小型アラガミ。今回のターゲットでもある。リンドウが神器を構え、新人二人もそれに続く。
「遠距離攻撃に気を付けろ！」
リンドウが神器を振ってふわふわと浮くザイゴートを叩き落とす。地面に落ちたそれを三日月が潰す。
ユウも新型の特性をさっそく発揮している。剣形態から銃形態へと変形させた神器をザイゴートに向け、アサルトの連射で撃ち落としていく。ザイゴートはたちまちその数を減らしていった。
残り数体となった、その時。
「ガァァァアッ！」
咆哮が響く。猿のようなそのアラガミは〝コンゴウ〟だ。コンゴウは聴覚に優れている。戦闘音を聞きつけてやってきたのだろう。
「チッ、中型が来たか」
リンドウが毒づく。初仕事の新人には荷が重いだろう。ここは撤退するべきだと考え、ポーチからスタングレネードを取り出す。轟音と閃光をまともに喰らえば、たとえアラガミであろうとしばらくは動けない。
ピンを抜いて放り投げた。同時にコンゴウが身体を丸める。タイミングをしくじったと気付くがもう遅い。
「うわあっ！」
ボールのように回るコンゴウはスタングレネードを受けて昏倒する。しかし回転は止まらない。気絶したままごろごろと転がってきてユウを轢いた。
吹き飛び、壁に背中をぶつけたユウはぐったりとして動かない。
「ユウ！　くそっ、撤退するぞ！」
「……」
「ミカヅキ！　指示を聞け！」
三日月の脳裏に浮かんでいたのはかつて死んでいった仲間たち

だった。ビスケット、シノ、明弘――俺が死んだとき、アトラを残して逝くのはすごく『寂しい』と思った。あいつらもそうだったのだろうか。

だとしたら、この世界の仲間にそんな思いはさせない。

三日月は神器を握りしめる。かつてバルバトスが握っていたものと似ている、十字にブレードが交差した『バスターブレード』。

「ふっ！」

鋭く呼気を吐きながら、コンゴウの側頭部に神器を叩きつけた。